

松本まるごと博物館と市民学芸員

なぜ集まったのですか

レジュメに「まるごと博物館」を「丸ごと」と書いて出したところ、「ひらがなですから、書き直してください」と指示を受けてしまいました。こうしたことでもわかりますように、私は現在の松本市

の文化行政について、まったく知識を持っておりません。ですから、今日は市の「松本まるごと博物館」構想とは直接関係せずに、私が日常で思っていることを述べたいと思います。このために、皆さんにとって、場合によるとお聞き苦しい点があるかも知れませんが、その点はお許しいただきたいと思えます。

なぜ、こんなことをお断りしなければいけないかというと、今日ここにお集まりの皆さんは、ちよつと変わっているのではないかと思うからです。この大雪の中を、一週間に一度しかない日曜日に、何でまた、こんな題名の講演を聞きにくるのだろうと疑問を感じたからです。本当のことをいうと、来たくはなかったのだけれども、動員された



松本の大雪

んですよ、絶対行きたくないって断ったんですけども、上の方から命令をされて来たんですよ、という人がいたら手をあげてください。そうですか、この中にはおいでになりませんか。

私は博物館が大好きなんですよ。話の内容はわからないけれども、博物館が好きだから雪の中を来たんですよ、という人がいたら、手をあげてください。一人だけおいでですね。

間違えて来てしまった人がいたら手をあげてください。さすがにおりませんね。

笹本という名前を知っているから、来たのだという人はいますか。あつ、四人も来てくださったのですか。これはまた奇特な人がいるものですね。

博物館とはなんだろう

多くの人は、これまであげた以外の理由でここにきたようですが、博物館に興味を持っていることは間違いないと思います。

博物館の現状については微妙な問題があるような気がいたします。私は博物館を学びの場所だと理解しています。単純に見学する場所ではなくて、いろいろ考える場所だと思っています。ですから、博物館であろうが、美術館であろうが、学校であろうが、すべて自己研修の場であつて、観光施設でない、と私は考えています。いうならば、私たちはいつたいどこから来て、どこに行くのだろうかというのを考え、学んでいく施設の一つが、博物館なのです。

自分を学ぶ

それでは、私たちにとって自分を学ぶとは、いったいどういうことなのでしょう。私が一番知りたいのは、「私」はいつたいどこから来て、どこへ行くのだろうかという事です。「私」はいつたいどんな人間なのだろうか。「私」は社会に役に立つのだろうか。「私」は、過去、現代、未来の時間的リングの中でいつたいどういう役割を持っているのだろうか、こうした問題を考えるのが学ぶことだと思っています。

思索するのが私であり、私の頭脳を使っている以上、中心はすべて私という個人です。そうした場合、私は、私という人から私を構成員の一人としている家族、日常的に付き合いをする範囲、それから住所もしくはかつて居住した市町村、そして県、国へとという順番で、考える範囲を広げていきます。学生に、「長野オリンピックは何年に開催されましたか」と聞きますと、多くの人は、「私が中学校何年生だった時だから、何年です」という答え方をします。私はこうした考え方をすばらしいと思います。年表のように、自分とは関係なしに絶対的な時間軸をつくるのでありません。私たちの行動や記憶のほとんどは「私」が主体なのです。ですから、「私が何歳だった時」という言い方をできる人は、自己を大切に、自己認識のできる人です。

私たちのまわりにある学校教育では、「私」のことは教えませんし、一番身近な地域や市町村のこと

をほとんど教えておりません。でも、私たちが「私」とはなんだろうと考える場合、少なくとも松本市民ですから、市民にとって松本はどこなところだろう、松本にはどんな特徴があるだろう、といったことを学んでいかなければいけません。学ぶことは、「私」の位置を確認する過程です。「私」を知るために、私たちは学び、思索するのです。

私の場合は、勉強してこれまで知らなかったことがわかったり、新しい解釈ができたりすると、人に教えたくなります。自分が感動した事実などをわくわくして教えたくなります。そのような、知っていることを他の人に共有してもらおうために教えたいと思う心が、皆さん一人一人が学芸員の役割を果たす原動力になります。

未来は良くなるか

「私」の位置ということで、皆さんにお伺いしたいのですが、日本の五〇年後の社会は今よりも良くなると思う人は手をあげてください。一名だけです。

精一杯いって、今のままだろうという方は手をあげてください。半数近くいますかね。

それでは、今より悪くなるとお考えの方は手をあげてください。寂しいことに、多くいらっしやいますね。

ちなみに、私の質問に対して手をあげてくれない人はどういう意見なのでしょう。考えていない

のでしょうか、考え中なのでしょう。博物館は考えるところだと思いますので、ぜひ共に考えていただきたいと思います。

この問題を毎年、私の学生たちに問いかけてきました。学生たちに尋ねてみますと、これから社会が良くなるとは考えなくなっているようです。残念なことに、もう、日本の未来が今より良くなるなど判断する学生はほとんどいないのです。これは私にとって寂しい限りです。未来にバラ色の夢を持ってない学生たちによって、これからの未来がつくられていくのです。でも、未来が良くないと考えざるを得ないような学生たちを育てたのは私の責任でありますし、皆さんの責任でもあります。

こうした未来像を抱く学生たちの側に立つてみるならば、現状の社会で夢を抱けといわれても無理です。下手をすると、現状のまま突き進めば地球温暖化で環境が破壊され、地球そのものが駄目になるかも知れません。自分たちは何も悪いことをしていないのに、いつのまにやら国家が大変な借財をしていて、その借金は自分たちが負わねばならないのです。自分たちは悪くないのに、先人たちが空気を汚し、化学物質を空中にまき散らしたために、アトピーその他の病気に侵される者が増えているのです。

子どもたちが未来に夢を抱けない事態を、皆さんはいったいどのように考えるのでしょうか。歴史学を学んでいる私にとって、未来は良くなると信じるのが一番精神的に楽です。そしてまた、そうありたいと思って活動してきました。私が学生だった頃、歴史は常に進歩する、発展するとみんなが考

えておりました。古代、中世、近代などといった時代区分は、発展段階を暗黙の了解としてきました。私も人類は進歩していると確信してきましたのです。

でも、今はどう考えてもそんな状況じゃないですよ。松本市を含めてどこの市町村でも、経済的に不況だ、不景気だといっています。このような発言の背後には、経済が良くなるのが進歩だという概念があります。景気が良くなること、経済力が大きくなること、すなわち経済が発展の基礎だとする認識は、もう一度考えなければいけない時代に入っています。経済以外についても、従来のように進歩するというだけで時間経過を見て良いのか疑問なのです。少なくとも、人類が滅亡する危機に瀕したり、人類が生活舞台としてきた地球環境が人類によつて住むのに不適合になることは、人類にとつての進歩ではないはずです。

博物館のあり方

こういう曲がり角にある時こそ、私たちはもう一回、自らを振り返り、自分はいったい何だろう、と考えるべきです。私は思索のために用意されている施設の一つが博物館だと思います。過去がいかにばかりであったかを認識した上で、今の社会では何が欠けているのか、どのような点を評価すべきなのか、これをしっかりと把握し、どのようにしたら少しでも良い未来が開けるかを考える、その思索の場だから必要なのだと私は思っています。

博物館という語を『大辞林』という辞書で引いてみますと、「歴史・芸術・民俗・産業・自然科学などに関する資料を集め、整理・展示して一般の利用に供し、あわせてこれらの資料の調査・研究をする機関」だと書いてあります。何よりも資料を集め、展示がその次に来て、研究をする機関だと書いてあるわけです。

資料の収集・展示・調査は、自分たちでつくり出した問題に対して、解答を求めるための手続きにすぎません。松本市立博物館などに来ますと、展示されているものがすべてのような気がしますが、実は博物館で展示されていることはごくわずかです。ちなみに、私が理想とする博物館は、わからないことを並べてくれる博物館なのですが、どこでもわかったことしか示してくれません。展示されていることは、わざわざ展示されなくてもわかることが多いように思います。でも、私たちが知りたいと思うことの圧倒的な部分はわからないのです。私は職業として歴史学を専攻してきているのですが、わかっていることはほとんどありません。疑問がいつばいあるから勉強するのです。

とするならば、資料の収集、調査、その他を通じて、こんな点もわからない、今私たちはこんなことが理解できないという展示をぜひして欲しいものです。どうも今のところは、学芸員にとってわかるものの展示になっています。我々は、知るための手続きとして資料収集その他をするのですから、わかっていることだけを展示するのは博物館の本来の姿ではないと思います。

私は旅行で各地に行くと、すぐ博物館へ行きたくありません。ちよつと時間があると、博物館、美術

館、図書館へ足を向けます。他地域の博物館へ行くと、自分たちの住んでいる土地と比較しますから、松本の特徴がよくわかります。松本の特徴がはつきりするということは、松本にはここが足りない、あれがすばらしいと見えてくることでもあります。

けれども、自己認識をしに行く、思索の場になりうるような博物館は、目下のところあまりないようです。多くの人たちは博物館を見に行つて、ここはこんなところかと、展示を見てきたことに価値があるとして帰って行きます。だからこそ、私たちはもう一回、博物館とはいったい何だろう、という基本的なことを考えていく必要があるのです。

松本が好きですか

ご参加いただいている皆さんの中に、松本市民はどのくらいいるのでしょうか。手をあげてください。ずいぶん多くの方に来ていただいていますね。ありがとうございます。それでは、市民でない人は手をあげてください。えー、市民でない人も参加していただいているんですか。不思議ですねえ。松本市民の皆さんの中で、松本が大好きだという人はどのくらいおいですか、手をあげてください。おー、すごいですねえ。こんなにあくさんの方が松本を愛しているんですね。特に向こうの奥さんはいいですねえ。最初にばつと手をあげてくれました。

ところで、松本にはいろいろいいことあるという人はどのくらいおいですか、手をあげて



松本市内から見た常念岳
と槍ヶ岳

とつても良いところですよ、こんなところも、あんなところも見てください、という案内本を作っています。松本が嫌いだったら、こんな本を作るわけがないですよ。でも、私にとつて松本は住んでいる場所ですから、もっともっと良くなって欲しいので、皆さんにとつて聞きたくないこともいうのです。

先ほど「松本が好きですか」と尋ねて、「好きです」と手をあげてくれた人のうち、少なくとも三分の二の人は、いいことがあると態度を表明しています。私はこれが松本を学ぶということだと思います。つまり、松本の好きな人は、松本のどこが好きか見えるはずですね。好きな場所、とつておきの場所があったら、他の人に自信を持って、ここがいいですよって案内できますよね。同時にこうした場所をもっとつくって、気持ちのいいところを増やすはずですよ。皆さんのように松本が好き

ください。先ほどの奥さんは積極的です。松本は好きだけれども、いいことがあるって、これ、最高ですねえ。つい先ごろ、山梨へ帰ったところ、「先生はいつも松本の批判ばかりしているけれども、松本が嫌いなのですか」と、知りあいから質問されました。私は松本が嫌いではありません。それどころが大好きです。前に「すばらしい松本」(信濃毎日新聞社 二〇〇一年刊行)という、松本は



松本城太鼓門と石垣

な人がいっぱいいたら、松本はもつと良くなっていくはずですよ。住民が住んでいることに自信が持てないような市だったら、もう市としての体裁をなしていないのではないかと思います。

松本を説明できますか

皆さんは、松本のすばらしさを、どのくらい他人に説明しているのでしょうか。他地域の人、自分たちの子どもや孫に、松本は本当に良いところだよって自信を持って、何度も繰り返しながら伝えていく人はどのくらいおいででしょうか。そういうことをしているという方がおいででしたら、手をあげてください。ほとんどいないですね。これが、私たちの実態です。つまり、皆さんは誰一人、「松本まるごと博物館」の学芸員にはなっていないのです。

もう少し続けましょう。皆さんが、松本へ友人を連れてきた時、どこへ案内いたしますか。つい先日、私は学生に質問したのですが、その答えを聞いて実はがっかりしたんですよ。学生が案内するトップは、松本城でした。そこで、「松本城へ行つて、何を見せ、何を案内するのですか」と聞いたら、案外何も見てないのです。松本城の面白い石垣とかお堀の広さだとか、そういう歴史的な背後を考える材料を一切知



アルプスと桜

らないで、何となく建物の中に入って帰ってくるようです。その次にどこへ行くのかと尋ねると、「開智学校かな」とのことでした。一年生に聞いたら、「山を見せます」って答えました。この山は当然、北アルプスです。そこで「君ねえ、あの山は松本の山じゃないんですよ」っていったんです。「松本からは山がきれいですよ」という学生が多いのですが、「うーん、でもなあ、近くに行くと、近ごろ山も汚いんだよなあ」などと話をしたばかりです。学生たちが案内したという場所は、大変限られているのです。

皆さんの中には、いわゆる松本の観光ガイドには載ってないけれども、よそから人が来たらここへ連れて行きたい、私のとっておきのか。ほとんどいないようですね。私は、あそことあそこくらい連れて行きたいなあというところはありますけれどもねえ。皆さんが自分のとっておきの場所を持たないというところは、松本の良いところを知らないってことですよ。それはそのまま、他の人に松本は良いところですよって、説明できないことになるのではないのでしょうか。

博物館は教育施設

博物館はいったい何のために存在するのでしょうか。私はどうもこの頃気になるのです。各地の博物館へ行きますと、どのくらい入場者があつて、どのくらい収入があるという話を聞きます。私はこういう種類の話題が大嫌いです。博物館がもうけの対象、観光施設になつていような気がしてならないのですが、皆さんはどのようにお思いでしょうか。

皆さんの中で、松本市立図書館へ入つて入場料を取られた経験のある人はいますか。図書館は普通タダですよ。図書館でお金を取るのはおかしいですね。それはどうしてでしょうか。勉強してくれる人は、そのまま松本市にとって未来をつくる人材、財産だからでしょう。松本をしつかり考えてくれる人が一人でも増えれば、松本が良くなるのです。博物館は本来、私たちが学ぶ場所ですから、学校や図書館と同性質の教育施設だといえます。

博物館の入場者をいう時に、市民がどれだけ入っているか、一切問題にされていないように思われます。市民が博物館に入つて、その中でどれだけ考え、学んでいるかという視点が確立していないのです。これはひよっとするとすでに、博物館が本来持つべき機能を失いつつあることを意味するかも知れません。

これから申し上げますように、私はどんな場所でも学ぶことができると思います。松本市内のどこに行つても勉強すべきことはあるはずですが、でも、学ぶための施設として博物館が用意されているの

だったら、もつと私たちは学んでいいはずですね。博物館が観光施設に思われている場所では、市民の間に私たちの博物館という考え方が弱いようです。博物館は我々市民の財産なのです。我々がこへ来ていつも楽しい、学べるようなものでなかったら、存在意義はありません。観光客のためだけに、これだけ市民のお金を使って建設し、維持する必要はありません。間違いなく、観光客を相手にして博物館がもうかっているかといえば、すべてをチェックすれば入場料で博物館の運営経費はまかなえない、つまり赤字になっているからです。

松本は、どこが良いのだろう。私たちにとって何が足りないのだろう。今、社会が曲がり角だつていうけれども、いったいそれはなぜだろう。博物館でしっかり考えることができれば、こうした問題も浮かび上がってくるはずですよ。

幸せはお金で買えない

話がどんどん飛びますけれども、ついこの間、私は日本史概論という授業で「君たちにとって、幸せってなんだろう。お金で幸せは買えるだろうか。物やお金があると幸せなのだろうか」と尋ねてみました。皆さんの中で、お金で幸せが買えると思う人は手をあげてください。いませんね。では、お金がなくても幸せはあると思う人は手をあげてください。ほとんどの人がこのようにお考えですね。私の授業を受けた学生の中に、一人だけお金だという人がいました。この人はいつもみんなと違った

主張をし、しかも指名して話をさせると要領を得ないので、意図的にみんなに反対しているのだと思います。一人を除きますと、学生たちは全員、お金はなくても幸せが手に入ると考えているようです。お金や物の充足と幸せとは必ずしも結びつかないと判断しているのです。

皆さんが子どもだった時、幸せでしたか。皆さんが領いておられますね。間違いなく今の方が、社会に物もお金もありますよねえ。私たちが子どもの頃は、食べられなかった食品も、今ではたくさん食べることができます。着るものも昔から見るとはるかに良くなっています。教育施設も以前とは比較にならないくらい充実しています。それで、私たちは幸せになっているのでしょうか。私たちが子ども頃の頃よりも、今の子どもたちは幸せだといえるのでしょうか。冷静に考えてみるに、必ずしも幸せだとは断言できません。

つまり、人にとって豊かさって何だろうと考えると、物が用意されているだけでは豊かだといえないことが多いのです。松本についても従来のように、建物や物があれば豊かで立派だということではない時期に来ているのです。博物館についていうなら、松本はこんなものが誇りですよ、と市外の人に展示するのみでは、いけないのではないのでしょうか。人にとっての豊かさが物だけではないとすると、豊かさの根元、つまり心の豊かさを展示できるように考えていかねばなりません。

学ぶ対象はどこにでもある

博物館が学びの場、私たちの過去、現在、未来を考える場所だとしたら、こうしたことを学ぶ対象は何も博物館という狭い場に限定されることはありません。松本で学ぶべきものはいくらでもあります。

簡単にいったら、日常私たちが使っている言葉だって、食べ物だって、周囲の景観だって学ぶべき教材です。この窓から見える景色の一つ一つも、それぞれの次代の中で変化してきたはずです。私はいろいろな写真集を集めるのが好きで、よく眺めているのですが、それを見ると松本城の周囲の風景が大きく変化してきたことがわかります。今窓の外に広がる景観は、一〇〇年後には間違いなく



林の道祖神

存在しておりません。そうだとしたら、この景観そのものも学びの対象です。松本は美しい景観を持っていますが、それを大事にし、学んでいく必要があるのです。

松本の街角には道祖神がありますが、名古屋では双体道祖神に代表される道祖神を見ることができません。山梨県では丸石が道祖神になっています。松本の道祖神の形はなぜあのようなものなのか、彫ったのは誰か、誰が維持してきたのか、これも学びの対象です。

「とんでけ」や「何々だじ」といった松本の言葉は、よそにはない独特の響きを持っていて、私たちを結んでくれます。こうした言葉の分布や出来方だつて学びの対象です。

このような、私たちにとつて密接なさまざまな日常で使う言葉や景観、道具などは、わざわざ博物館に來なくても学べるはずで、そうした身近な事柄を学ばないで、市民は松本のことをわかつたといえるのでしょうか。

となれば、教材は松本市まるごとになります。

みんなで疑問を持つ

学びの最終的な問いかけは、私はいったい何のために生きて、何を目的にしているのだろうかという事です。私は幸せになるために学び、より心豊かになるために前に進んでいきたいと考えます。学ぶのは自分のためなのです。

それならば、人間の特徴はどこにあるのでしょうか。間違はなく、群れるところ、みんなでいろいろ行動したがるところにあります。多くの人が協同し、競いながら松本を学べば、一人では気がつかなくなつたような疑問点も見いだすことができ、解答も多くなります。

今年、私は信州大学の後期授業において、一年生のゼミを二つ開講していました。一つのゼミでは、武田信玄が出した古文書のコピーを用い、簡単に読んだ上で、「わからないところはどこにある」って

聞くわけです。学生ははじめのうち自己認識ができていませんから、自分が何を知っていて、何を疑問に感じているのかわかりません。そこで私が誘導するのです。たとえば、「はんこが押してあるけど、はんこって何の役に立つんだろうね」とか、「宛名と差出人の距離は意味を持つのかねえ」とか、「君たちがきれいに文字を書く時は、どういう時だろうねえ」というように、誘い水をかけてやりますと、終わりの頃になりますと学生たちが慣れてまいりまして、一つの文書につき二〇個くらい質問が出てくるようになりました。もう一つの授業では、木村伊兵衛という写真家の撮った写真をみんな読んでいます。写真をじっくり見ながら、何が撮られているのか、何が撮られていないのか、写真家は何を意図してこの写真を撮ったのか、映像に見えるもので我々が知らないものがどれだけあるかなど、ワイワイガヤガヤいっていますと、同じようにどんどん質問が出てきます。

多くの人がいると、自分が気付かなかった質問がいっぱい出てきて、自分が出した問題も大きな意味があるのだと気付かされます。今、学生から授業の評価をしてもらっているのですが、その中には「自分が気付かなかったことを次々にいってくれる友達はずい」といった意見もありました。

多くの人で学べば、一人では気付かなかった問題が、たくさん出てきて、解決も多面的になされます。ですから、学芸員も一人よりは多い方がいいのです。市民みんなが学芸員になって学んでいく。市民みんなが市内のことを説明できる。そういう運動ができるか、できないか、これが「松本まるごと博物館」構想の一番大事な要件になってくるのではないのでしょうか。

足りないものも展示して欲しい

先ほど皆さんに質問した折り、日本の将来はこのままで良くない、これまで進歩と考えてきたものが本当に進歩といえるか、私には疑問だと述べました。

博物館に展示されているものも、これと似たような状況にあります。どこの博物館へ行っても地域の自慢品がいっぱい展示されています。足りないもの、良くないものの展示って見たことがないですね。松本市の悪いところの展示をやってくれたら私は喜んじゃいますけど、一回もやってくれませんか。よくよく考えてみますと、私たちのまわりには足りないものがいっぱいあります。

今、国際的にあちらこちらで紛争が生じ、非常に危険な状況になってきて、いつ戦争が起きるかわからないので、国防をどうするかしつかり議論しようという話題がよく出てまいります。そこで議論されるのは軍事力、暴力でしかありません。日本国をどうやって守るかという話題です。国家は私たちの生命と安全を守ってくれて、はじめてその役割を果たします。それに際して私が一番気になるのは、日本において人が生きていく根元が一つも守る状況になっていないことです。

人間にとって生命の一番のものは、水と食糧です。ところが、日本の食糧自給率は四〇パーセントです。しかも輸入する六〇パーセントの食糧について、輸入する先の海外でどのような農薬が使われて、生産や管理がされているかとはつきりとチェックしておりません。日本に食糧を運んでくる時、



千鹿頭池

保存のためにいかなる薬が使われているかもしれないように思います。これで、日本の国民の体内部からの安全は保障されるのでしょうか。

過日、上伊那郡辰野町で飲料水に油が混入していると大騒ぎになりましたが、安全な水は我々が生きていくのに必要です。幸い松本の水はとっても美味しいといえます。けれども考えてみると、松本でもちよつと山の中へ入りますと、都会からのゴミがいっぱい捨てられています。中山で大騒ぎになりましたけれども、あのゴミの成分が水の中にとけ込んで入ったならば、肉体の内側から、日本人が崩されていくかも知れません。

私たちが足りないものをきちんと見ていくというのは、まわりに流されないようにすることにつながります。今のようには、アメリカの動きを何の疑問もなく追従したり、いったんテレビでコマースャル放送されると、そればかりに目が行くというのではなくて、当たり前のことをきちんと見抜く力が必要です。

先ほど私は、今の子どもたちは未来に対して夢を抱いていないといいました。夢がないせいでしょうか。若い人の公共道徳がなくなっていないように感じます。きちんと挨拶もできない子どもたちがいつ

ばいです。信州大学においても授業中、今ここにお集まりの皆さんのように、はじめに聞いている人が少なくなりました。ただ私の場合、声が大いのとすぐ怒鳴りつけるのと、ちょっと怖いと学生が意識しているのかも知れませんが、「先生の授業は聴講する者たちが比較的静かだ」と学生がいつていました。とすると、他の先生の授業はどんな状態なのか知りたいものです。

私がプロモートし、会社の社長さんなどが講義をしている授業についての学生の評価の中には、「授業中に学生たちがみんな出て行ってしまう。これは、講師に対して失礼だ。笹本先生がずっといるべきだ」というのがありました。大学生が授業の途中から出て行くのは当然失礼です、でもそれを監視するために私に教室に控えているというのでは、大学生が小学生と同じではないか、と私は思いました。公共道徳はどうやったら手にできるんだろうか、博物館で考えることはできないでしょうか。

松本にとって一番大事なのはすばらしい景観ですが、この景観も博物館の中では展示できません。こういった様々な問題をしっかりと考えなければなりません。つまり足元をじっくり見ないで、難しいことだけを並び立てても、市民が日常生活を送る上で何の役にもたないのではないのでしょうか。歴史学をやっている者たちの間では、少し前まで国家のことを論ずるのが一番重要だとされてきました。でも議論ばかりで、立派なことをいう人が必ずしも実践者でないことを、私ははつきりとこの目で見てきました。今の私にとっては、身のまわりのことをしっかりと論じていく方が重要です。手に届くことを議論し、多くの人の共感を得ながら行動していくことが大切だと考えます。

博物館の展示も、まずは市民にとって身近な身のまわりに関する展示からしていったらどうでしょうか。

余っているものを見る

足りないものを見たらもう一つ、余っているものを見たらどうでしょう。一番大きいのは、ゴミですよね。先ほどいいましたように、松本でもちよつと山の中へ行けばあれだけゴミが捨てられています。公共道徳のなさによるのかも知れませんが、道路の近辺には空き缶が山ほど捨てられています。大学の中でも、いたるところに煙草の吸い殻が落ち、机の中にまでいっぱいゴミが捨てられています。これはいったいどうしてでしょうか。

私たちのまわりでは、大量消費が進歩の代名詞のようにいわれてきました。大量に消費すればゴミが出るのは当たり前です。「不況だったならば、国民一人一人がもう少しお金を使えば景気が良くなる」といった財界人がいましたよね。あれは、物をたくさん使う、お金をたくさん使って物がいっぱいになることが進歩だ、という発想法ですね。そこではゴミの問題は一切考えに入っていないのです。これでいいのでしょうか。

今日、雪の中をこの会場にやって来ましたが、有難いことにここは暖房が入っていて暖かいですよねえ。これは個人的にはうれしいことですが、世界の中で、日本やアメリカだけがこんなふうに化石

燃料を使っているのでしょうか。たとえば、世界でもっとも化石燃料を使っているアメリカが京都議定書にすらオーケーしない。ああした独善的な考えはいつたどこから出てくるのでしょうか。地球環境は全人類のものなのに、もっとも破壊している国が、経済力や武力があるからと勝手にしていいのでしょうか。アメリカは世界に向かって大切な人間の命といていながら、アフガニスタンやイラクなどとの戦いの状況を見ると、同じ命の価値があるべき人間を、敵国の住民に対しては同じ大切な命だと見ていないように感じられてなりません。

日本についても、一人当たりで他国よりはるかに多いエネルギーを使うことは本当にいいのだろうか、限りある石油などの化石燃料を私たちの時代だけでこんなに使っているのだろうか、というようなことを、もう一度、私たちは考えていく必要があります。

松本は松本の尺度を

独自の自然環境と歴史を持つ松本は、よそと違った松本なりの指標をつくらねばいけません。私に気になるのは、松本がリトル東京をめざしているようで、松本でなければならぬ文化を創り出しているようには見えない点です。未来の松本に対して独自の尺度を松本が有しているようには見えません。本来ならば、松本がめざすものは、東京でも大阪でもない、独自の松本らしさのはずです。私たちの町は日本全国どこへ行っても、松本の住民です、と誇りを持っていて、はじめて価値が公的な



信州大学から見た市の北部

というよりも、東京をモデルにして、リトル東京化している気がしてなりません。これでいいのか、悪いのか、みんなでもう一度考えてみたいものです。それもまた、「まるごと博物館」の中で学芸員たる市民が考えていけばいいでしょう。それは市民の一人一人が、主体を持って市政に参加することにつながります。

私のような意見もあっていいし、いや、これがいいんだとまったく異なる主張もあっていいはずですよ。いっぱい意見が出てくる中で、松本はもっと良くなっていくはずですよ。

変わる松本

松本の町は変わりましたよね。市街地の趣などはものすごく変化しました。昭和五九年（一九八四）には私は信州大学に赴任しました。それより前の昭和四五年から四年間の学生時代も松本で過ごしました。当然のことですが、この長い期間に松本は大きく変貌を遂げました。変わってきて良い部分と、悪い部分が共にいっぱいあります。どっちがいいとはちょっといいにくいところもありますが、ともかく大きく変わってきました。おそらくこれからも、どんどん変わっていくでしょう。

松本が今後とも大きく変化を続けるのなら、松本で変わっていけないところはどこにあるのか、変

わっていつて欲しいのはどこなのか、松本を愛する皆さんが学芸員として大きな流れの中で松本を考えなかつたならば、将来の町がどうなつていくかわかりません。学芸員は、本来、過去を知り、未来を考えながら主張し、社会をリードする役割を持つはずです。松本の町の未来も市民一人一人が学芸員としての立場になり、みんなで作えましょう。

学芸員は主張する

どんどん話がずれていきますが、一番楽しい博物館の見学の方法を教えたいと思います。それは展示をした本人に語ってもらいながら展示を見ることです。展示する側には、思い入れがあります。特別展などでは、どうしてもこれをやりたい、主張したいのだという意志があるはずです。私たちが何も知らずに外側から見たら、「何、このつまらない展示は」と思つていても、展示者の話を聞いていると「なるほどなあ」と、思わず引きずり込まれていく展示がいっぱいあるんですよ。学芸員は自分が主張したいから、自分が感動したから、その主張や感動をこめようと、展示に努力します。こうした展示は面白いのです。逆に主張のない展示は、人の心をうちません。

今日、私がこの場所で話をする場を与えられたということは、私が自己主張できる機会が得られたということなのです。だから、私も私の意を伝えるためにしゃべりたいのです。

皆さんが、すなわち市民全員が学芸員になることをめざすのでしたら、私はこれをいいたいという

主張を持たねばならないのです。そういう意味で、松本の町のどこが良くてどこが悪いのか、一人一人が主張できるように、市民がしっかりと考えていかねばなりません。

文化を創造する

ここまで述べてしまいましたので、もう主張したいことについてしまいます。

松本の町の未来を考えるのでしたら、なぜこんなに道路を広げて車を通してしまうのでしょうかねえ。私でしたら思いきって、大きなモータープールをつくって、町の中には一定の時間、車を走らせず、できるだけ多くの人に歩いてもらうようにします。日本で一番安全な町、つまり交通事故にはなりやうがない町、こういう主張もいいかも知れません。よそからの人が通り抜けるだけでなく、買い物や史跡、人を楽しんでいただくためには、じっくり歩いてくれるような算段が必要でしょう。

地域によっていろいろな方法があると思うのですが、現状では日本全国どこに行っても同じような町になっています。私たちは松本らしさをめざして、松本の文化を創っていかねければなりません。今ここにお集まりの皆さんは、松本まると博物館の学芸員になるつもりになっていただけませんか。つまり、文化は我々が新たに創るものなのです。これまでのように過去の人々が創り出し、維持してくれた文化遺産を享受するだけではいけないのです。どこのどんな文化も特定の人ではなく、地域の多くの人が支えて創り、育て、維持してきたのです。私たちもその担い手になっていこうではありません

せんか。

県内の学芸員さんたちの何人かが、月に一回、私の研究室に集まって、頑張つて勉強しています。この仲間たちが今年中に、論文集を一冊出します。研究書ですからちよつと値段が高いのですが、刊行の暁には皆様もぜひご購入してみてください(『山をめぐる信州史の研究』高志書院 七、三〇〇円)。彼らは年休を利用してでも、今勉強したいと月々集まっているのです。この人たちは常にそれぞれふるさととの未来を考えて動いています。私は、このような人たちが次の歴史をつくっていくだろうと思っています。

松本が誇るもの

皆さんももう一回身のまわりをじっくり見ることによって、それぞれの位置を確認して、できるものなら私たちが、文化を創造していかなくてはなりません。たとえば、松本が誇るものがいままでたつても松本城だけで良いんですかねえ。この他に松本には何があるのかと聞くと、すぐに出てくるのが開智学校です。その他に、私の好きな旧制松本高等学校の跡があります。

じゃあ、私たちの生きてきた昭和の代表的な文化財は何でしょうか。日本が繁栄をきわめた昭和の時代でありながら、将来に残せるものがどれだけあるでしょうか。現在の平成の時代、五〇〇年先に残せるものをどれだけ用意しているのでしょうか。松本では平成になってからどれだけ、将来に残せ



開智学校



旧制松本高等学校

る文化をつくり上げたでしょうか。
　　こういうふうに考えますと、いまだに私たちは松本の古い文化に依存し、それを食いつぶしているような気がいたします。皆さんは松本が好きだというのですが、好きだというのだったら、お子さんやお孫さんに、松本のここが好きだよ、ここがすばらしいんだよ、ともつといいませんか。まわりの人間にここが松本の優れている点だよ、ともつと主張しませんか。さらに、ここが悪いよつてもつといいませんか。私たち一人一人が町を良くしていくしかないのです。

松本市は観光客の誘致をめざしていますが、私にとっては観光以上に今ここに住んでいる住民が重要です。松本市の主人公は住んでいる人です。市民にとって住みやすい市が一番良いのであって、観光客のために住民が迷惑するような町づくりはすべきではないと思います。本当は住んでいる人にとって良くないような町へ、観光

客が来るわけがないのです。住民にとって本当に良い町だったならば、皆さんが住んでいてうれいなあとと思う心が顔に出ます。

失敗した先人も多い

松本でもどこでもそうですけれども、地域を良くするために努力してきた人はいっぱいおりました。博物館でそうした人を取り上げる場合には、成功者だけです。松本の市民の中で、松本が悪くなればいいと思っている人ははいはいはです。それぞれの人がそれぞれの力で、いつの時代にも努力してきたのです。でも結果的に博物館等で展示するのは、成功者だけなのです。成功者の後ろに、何千人、あるいは何万人という目立たない人や、失敗者がいるのです。私は失敗者になってもいいから、地域を良くするための一人になっていきたいと思えます。

とするならば、失敗者の展示だって必要になるでしょう。つまり、松本の先人たちはいったいどこで苦労してきたのか。松本の先人たちは地域を良くするために、どんなことをやってきてくれたのか。こういったようなことを、少しずつ考えていきたいものです。

松本市内だったら、どこへ行っても先人の足跡があります。何も、きれいなものを見るだけが、歴史を経たものを見るだけが、学びではないのです。この道路を開けてくれた人は誰だろう。なぜ、こんなところに井戸があるのだろうか。なぜこのお寺はここにあるのだろうか。こんなふうに、考えるべき

こと、学ぶことはいくらでもありながら、私たちはそれをやっております。

次の時代のために

私たちは、今から新しい文化を創って、次の時代にバトンタッチしていかなければいけません。少なくとも私たちは、子どもたちに対して責任があります。子どもたちが未来を信じられないようにしたのは、私たちの世代です。その最大の責任者は、時代をリードしてきた政治家のはずです。

こんな言い方をすると怒られるかもしれませんが、どうして政治家ってあんなにいい生活できるんですかねえ。なぜ、国会議員になる人の多くは父親も国会議員なんですかねえ。なぜお医者さんの家は、あんなに代々続くんですかねえ。考えてみれば、家職を続けているのは利益があるからです。普通に我々が公務員として働いていたら、総理大臣だった田中角栄さんのように、あんな立派な家が造れるわけがないと思うのですが、いかがでしょうか。私は朝起きてから寝るまでずっと職業に関わって、研究をしているのですが、どうして私は政治家に比較して富を持っていないのでしょうか。私は心の方は豊かだと思っていますが、物質的な豊かさは縁がありませんね。よくよく考えみると、今の社会できちんと仕事をしていたのでは、そんなにもうかるわけがないですよえ。

音楽家の子どもに特別な音楽家がずっと続くとは考えませんよね。野球選手の子どもが、すばらしい野球選手というわけではないですよえ。それなのに、政治家はどうして次々に親、子、孫へと続く

のでしょうか。政治家については才能が遺伝するのでしょうか。よくよく考えたらおかしい話ですよ。本来なら政治家はその時代の最も優れた人になってもらわなければいけないのに、そうならないように感じられます。社会をリードする政治家がこういう状況であるのは、能力を持っている人を見いだし、議員に選出していこうとする努力が我々に欠けているからで、私たちの責任です。

社会を悪くしている責任は私たちにもありますから、それをいかにして良くしていくかを考えていかなければなりません。とすると、私たち一人一人が文化を認識し、社会の次の時代を考えてくれる人たちを選出する必要があるし、個々人がそのための行動を起こしていかなければならないのです。

心に訴える展示

良い博物館は興味深い展示をしています。良い展示は、私たちの心を打つものです。

箕輪町だったでしょうか、過日、手作りの展示会で、「遊ぼ」というのを見ました。けっこう面白かったですよ。「遊ぼう、遊ぼ」いいですね。特別な展示はなくて、昔の遊び道具をいっぱい置いて、子どもたちと一緒に遊べるようになっていました。なぜ私はこういう展示が好きかというと、子どもを意識して、子どもに参加してもらって、みんなで遊んだら、幸せな気持ちになれませんか。これもまた展示だと思っんですよ。

みんながニコニコできるようにするには、何が足りないのだろう。私たちがニコニコした時には、

何があったんだろう。それを考えていかなければいけません。それこそ、もう一度、昔を振り返るってことじゃないですかねえ。昔を振り返るための材料が、博物館にあつていいはずですよ。

歴史のリングの一つとして

よく考えてみてください。皆さんが今ここにいるのは、歴史の賜物です。皆さん一人一人は今だけに生きているのではなくて、過去があつて、今を生きて、そして、未来があるから、あるいは、未来を信じているから、生きているのですよね。皆さんの先祖がなかつたら、皆さんは存在しないわけです。でも、今の子どもたち、あるいは今生きている人たち、私たちの多くが歴史の輪の一つだという事実を忘れてしまっているのです。

私たちはもう一度、歴史の輪の一部分だとの認識を強く持たねばなりません。

松本の誇り

このためにも、まずは市民のみなさんが、松本の文化についていたい何だろう、松本で伝えていくべきものは何だろう、松本で誇りうるものはいったい何だろう。こういうことを考えていかなければならないのです。その上で、良いものを育て、悪いものを変えていく。私はこれが文化だと思います。松本が誇るべきは、松本らしさです。地域のらしさは、すべての地域にあるはずなんです。なぜ松



玄向寺の石仏



松本城

本の良いところとして松本城だけしか見ないんですかねえ。私は大村に住んでいるのですが、大村にも玄向寺をはじめとしていっぱいいいところがありますよ。ちょっと山の中へ入ったら、一つ一つの草木だつてもすごくいいですよ。

今日はここに少し早く来てしまったので、お城のお堀の近辺をぶらついていたら、「カワセミ」がいました。

松本城ではじめて見ましたので、驚いてしまいました。山梨県に躑躅ヶ崎の館（武田氏館）という武田信玄の住んでいた館がありますが、その堀では見たことあるのですが、松本城にもいるんですねえ。僕はあの、本当に緑色の寶石のような姿で飛んでいくのを見ることができただけで、幸せだなあと思いました。

おそらく私の住んでいる大村には、もっとすばらしい鳥や獣がいるかも知れないのに、私は知らないのではないかと思います。ふるさとは松本だという前に、皆さんが住んでいる地域の誇りを持てる

ようにしたいものです。そういう意味で、私たちはもつと未来に対して、責任を持つためにもふるさとのことを知らなければなりません。松本そのものを知るためにも、まず先に自分たちが住んでいる場所を知りましょう。そして、松本市、長野県、日本という順序で知識を増やしていきたいものです。本当に皆さんは松本市が良いところだということを認識し、それを伝えるために学芸員となつているでしょうか。松本の市民はそこまで到達しているのか。これが、私にとっては重要なことです。

松本市民は恵まれすぎ

もう少しいいわせてください。ここへ来てつくづく思うのは、松本市民が恵まれすぎていることです。こういう講演会というのは必要かも知れませんが、市民の方からこれをして欲しいと上がってくる講演会が、どのくらい実施されているかが問題です。

今、皆さんここまで聞いてみて、こういう講演会が必要だと思いますか。もう一回でもいいから、聞いてみたいという人、講演の途中ですけれども、いたらちょっと手をあげてみてください。何か半分強制した感がありますが、多くの方に手をあげていただきました。ちょっと考えてみてください。松本市はこういう講演会を次々に用意しています。市民の皆さんは講演会などを自分たちの手で開いたり、こうした講演会を開いて欲しいといった努力を、どれだけしているのでしょうか。

博物館がないのに博物館友の会

私はたまたま縁がありまして、飯山市に行っています。松本に住んでいながら、松本市からはほとんどお声がかからず、早くから私を使おうとしたのが飯山市なのです。飯山市は人口が少なく財政規模も小さな市です。この市の文化活動を私は面白いと思います。

ここに持って来ましたのは『奥信濃文化』創刊号という、二〇〇一年五月に出た雑誌です。これは、いいやま博物館友の会が発行主体になっています。いいですか、いいやま博物館友の会ですよ。ところで、飯山に博物館があるということを知っている人は手をあげてください。手をあげた方がありませんが、実は飯山に博物館はないのです。博物館がないのにいいやま博物館友の会ができてしまったのです。博物館がないのに、博物館友の会を立ち上げ、みんなでふるさとの勉強をしようという動きが出てきたのです。すごいと思いませんか。その結果として、この雑誌が創刊され、今第三号を作っている最中です。

雑誌の編集はいいやま博物館友の会事務局なるものがやっています。実際は、埋蔵文化財センターの望月静雄さんという方が、一人でやっているのです。

飯山市の市民はふるさとを学びたいのです。しかし、学ぶべきものを提供してくれる博物館がないのです。博物館という入れ物がないのだったら、せめて、学ぶ場をつくれればいいじゃないか、ということでの雑誌は編纂されているわけです。

松本市は私も関係しましたけれども、すでに大変立派な全五巻一冊からなる『松本市史』を刊行いたしました。これは今でも手に入ります。『飯山市誌』は三冊で終わりました。ところで、『松本市史』を作るといふのは、出発点に過ぎません。松本市民が『松本市史』を読んで、「ここが足りないぞ、あれが足りないぞ」と言つて、さらに良いものを作つていかねばなりません。市史作りは、新しい文化、より良い松本市をつくるために、何が足りないのかという確認のためであり、それは不斷に続けられるべき作業なのです。ところが、どこでも予定の刊行が済むと、その段階で終わつてしまします。私が飯山で主張しているのは、永久にこの『奥信濃文化』を続けていけば、それだけでも文化になるはずだということです。こういう雑誌をずっと刊行し続ければ、これが博物館の展示品だと主張できると思ふわけです。私たちの飯山市には、博物館がない。博物館はないけれども、永遠にこういう雑誌で展示を続けていく、これが私たちのやり方だと主張することもできるはずですよ。そうはいくけれども、本当は博物館が必要だと思つています。でも建設することができないのなら、市全体が博物館だと思おうといつています。

飯山が欲しい施設

よくよく考えてみると、我が松本市と飯山市では大きな差がありますよねえ。先ほど関係者から聞いていてびっくりしたんですけれども、松本のこの博物館には大変な数のお客さんが来るとのこと

す。おそらく、地方博物館としては日本有数の入館者数でしょう。多くの入場者がある理由は簡単にわかります。松本城との共通券がありますから、松本城へ来る人がみんなこの博物館へも入ってくるのです。入館者の多くが観光客なのです。でも市民の皆さんにとっては、松本を知るための博物館かどうかは問題です。あまりいっては悪いのですが、どうも市民のための博物館という意識が、ここでは弱いように感じます。

松本城のような集客力の大きい文化財などを持たない飯山に、松本のように多くの観光客は望めません。博物館も観光客目当てにつくりたいのではないのです。飯山の住民としてふるさとをもっと知りたい、だから、学びのための案内所でもいいから欲しいのです。

私にとっては、展示よりは、なくなるものを今のうちに、きちんと集めて收藏すべき資料館の方が大事です。ふるさとはすでになくなってしまった大事なものがいっぱいあります。お祭り道具、古文書、農具、衣類など、あらゆるものが失われつつあります。今だったら、まだ間に合う可能性があるので、展示よりも先に集められるものは集めてしまおう、こういう考え方です。

こういう飯山市の状況から見ると、私たちの松本市には博物館もいっぱいあり、学芸員もいっぱいいて、学ぶ対象も施設も数多くあります。でも、よくよく考えてみると、皆さんは本当に博物館を利用しているのでしょうか。皆さんにとって、松本市は本当に学ぶ態勢ができていえるのでしょうか。

「阿弥陀堂だより」をめぐって

もう一つ飯山のことに触れさせていただきます。

一昨年から去年にかけて、飯山で「阿弥陀堂だより」という映画が撮影されました。この映画を見た人は手をあげてください。見た人がいますねえ。良い映画ですよ。あちらの方も頷いてくれますが、見てくれた人はみんな良い映画だといってくれています。もともとこの場で数人しか見えないということは、松本ではそれほど人気が出なかったのかも知れませんね。

それでは評判になった「たそがれ清兵衛」を見た人はどのくらいいますか。やっぱり「たそがれ清兵衛」の方が人気ありますかねえ。私は去年、お金を払って見に行った映画が、その二つしかないのです。正確にいいますと、「たそがれ清兵衛」は招待状をいただきましたので、一つはお金を払っておりません。「阿弥陀堂だより」は二度見に行きました。一度は飯山の試写会、二度目は松本で見ました。

実は私、「阿弥陀堂だより」のエキストラとして出ているのです。飯山の方から、「先生が走っている姿を見せてくれたら、市民も元気になるから、できたら走ってくれませんか」と求められたので、映画のラストのシーンに近いところで、松明を持って走る若者三〇人の一人になったわけです。「私は若者ではないのですが……」と断ったところ、「まあ先生、どうせわからんから」っていうので、全身に麻の衣装をつけて、頭には黒い布を頭巾のようにかぶり、地下足袋を履き、雪の中、松明を持っ

て走ったのです。

その直前にですね、「背の順に並べ」といわれて並んだのですが、私は背が低いので一番前だったのです。このために周囲の人から「先生、絶対映りますよ。カメラは前から撮るはずだから、絶対映るから、走ってよ」といわれ、必死で走ったら、カットは後ろから撮っておりまして、一番前で走っていた私は影も形も映っておりませんでした。

この「阿弥陀堂だより」の撮影に際して、飯山市の側ですべて対応していたのは武田誠さんという、振興公社の係長でした。この方は本当に寝食忘れて、地域紹介のために映画撮影に協力しました。太っていたのに撮影が終わった時にはものすごく痩せてしまい、みんなが彼の体を心配するくらいになりました。

武田さんは、監督の小泉堯史さんに飯山の良いところを映して欲しいと、様々な形で進言されたらしいのです。たとえば、私は今、小菅という集落に行っているのですが、そこからは妙高山がきれいに見えます。小菅はかつて、小菅山元隆寺を中心とした信仰の世界でした。小菅山を後ろにおいて、集落の中心から西に向かつて、道に沿い目をあげると、まっすぐのところに妙高山が見えるのです。私はかつて彼に、阿弥陀さんが関山山脈の山越しに見える形だと説明したことがあります。武田さんはそれを監督にいったのだそうです。監督は、「じゃあそれを撮ろう」ということで撮影したのですが、その時は、電線があると邪魔だからというので全部電線を取り外したとのこと。こうした形で飯

山の様々な場所が映画に取り込まれたのです。地域の意味を知る人が一人でも増えれば、地域も豊かに表現できるのです。

飯山塾

昨年、その武田誠さんから、電話がかかってくる、「僕たちは、今まで地域づくりを、ものづくりだと間違えていました。建物を造ったりすれば、地域づくりができると思っていましたが、それは間違いだということに気がつきました。先生がいう通り、人づくりから始めなくてはけません。松下村塾の塾生たちが命をかけたように、私たちは一生懸命勉強します。そのつもりになってふるさとを学びますから、ぜひ、飯山塾を立ち上げて塾長になってください」というのです。私は単純ですから、いい話だなあと思いました、「はい、わかりました」と答えました。

それから二週間くらいしたら、準備会が開かれるから飯山に来てくれ、と求められました、このこ出かけていったんです。数人の人が集まりまして、おそばを食べながらガヤガヤしていました。みんなはなぜここに集まったか知らないのです。「先生、挨拶を」と求められたので、「いやあ、私が来たのは、死に物狂いで勉強するから、飯山塾を立ち上げてくれというので、お手伝いに来たのです」といったら、「わかった、わかった、そういうことだったのか」という状況でした。話を通じていなかったのですが、その場で「じゃあ、やりましょう」ということになりました、今はだいたい七〇人

くらいが、塾生として集まっているのです。

飯山塾では先生を招いたり、レジュメを作ったりするために塾生が自分たちでお金を出しています。塾の日には、勉強したい人たちが集まっているのだから、自分たちがやると椅子から机まで、全部準備をしています。当日、来ることができない人のためには、お金をもらっている以上、レジュメを渡すべきだが、それは手渡しでやるうということになっています。もつと聞きたいのだったら、東京からでも講師を招けばいい。そのお金はみんな集めよう。これが飯山塾なんですよ。私はこうした動きを、けっこう素敵だなど思っているんです。

松本市民の場合、あまりに恵まれてすぎていて、学ぶ側の姿勢が弱いのではないのでしょうか。

自分たちが機会を求める

同じようなこととして、飯山では毎年シンポジウムを行っています。初回は「外国人の見た小菅」、次は「飯山からみた川中島合戦」、「火祭り」と来て、去年は「修験道の世界」でした。最初以外は本にしています。シンポジウムの最後に、私は「こういうシンポジウムが本当に必要かどうかということとは市民の皆さんが決めることであって、市が決めることではありません。皆さんが本当にやりたいと思ひ、やって欲しいと願うんだしたら、市の方に陳情してお金をとってくる。お金がなければ、自分たちでやります、と態度表明をしなければなりません」といっています。

松本では多くの博物館があり、こういう講座の機会もいっぱいありますので、市民の間にはいつの間にかこれが当たり前になってきて、自ら学ぼうという意欲が、だんだん欠け始めているように感じるので。

市民は自らどれだけ勉強しているのでしょうか。自らどれだけ懐を痛めているのでしょうか。極端かも知れませんが、自分で努力し、汗を流すと、学んだことが大事になり、より積極的に学ぶことができます。受け身になって、与えられるんだから顔でも出そうかでは、豊かな学びはできません。

信州大学の一年生を教えた結果、私に対する今年の学生の評価はずいぶん良く、うれしいことを書いてくれる人がいました。その中には、「先生の授業に出るようになって図書館へ行くようになってました。授業に出るようになって、準備のために毎週調べることが楽しみになりました」とありました。このように書いてくれた学生は授業が面白くなって、自分で調べてきています。こういう人は自らの力で成長できます。

本を自分で買って読む人は、お金を出した以上、間違いなく一生懸命読もうとします。自ら図書館へ行って勉強しようとする人は、単純に授業に参加して受け取るだけでなく、自ら考えます。松本市民のみなさんが松本で勉強する時、どれだけ学ぶための努力を繰り返しているか知りたいものです。

市民がお金を出している

このような講座のためのお金を出しているのは皆さんなのです。博物館を運営するためのお金を出しているのも皆さんなのです。

先ほどから述べていますように、私は大学で、授業が良いか悪いかを学生たちから評価されています。あなたの授業はどこが良い、ここが悪いと学生が評価書を出すのです。私は評価というのは、私と同等、もしくは私より研究している人がいうのだったらわかるが、たまにしか来ない学生が勝手なことを書くな、という思いも一方にはありますが、自分の位置がわかることはありがたいと思っています。学生がこの点は良くないと書けば、きちんとこうします、あるいはあなたのいっていることはこのように違いますと、返答書を書きます。今の社会においては、一人一人がきちんと存在理由を示さなければいけません。私のやっている仕事や研究はこれだけ意味があるんです。これをきちんと示さなければいけないのです。

皆さんが落語を聞きに行つて、つまらなかつたら「金返せ」といって、次からは絶対に行きませんよね。こういう講演をしても皆さんにとつてプラスでなかつたら、「もう来るな」というのが普通ですよ。皆さんは木戸銭を出しているのですから、そういう権利を持っています。でも、多くの場合は、市が講演料などを出しているから、市民は自分で木戸銭を出している気がないのです。

講演を聞いても多くの場合は、「今日は難しいこと聞いたなあ。何をいつていたかよくわからない

けれども、難しかったから良い講演だったんだよなあ」とか、もつとすごい人になると、「最初から最後まで寝ていたの、何か知らんけど、講師がしゃべっていたなあ」といいます。これで良いわけがありません。お金を出しているのは皆さんなのですから、自分にわかるように話をしろと求めるべきであり、寝たいんだったら家で寝るべきで、講演に来て寝つくのは講師が駄目だと主張しなくてはなりません。

税金を使って講演会をする場合にも、皆さんがこれを聴きたいと要求すべきだと思います。だとしたら、皆さんにとって松本の博物館はいいどういう意味を持っているのか、きちんと考えねばなりません。

学芸員の努力

博物館の学芸員のすばらしさをいうために、私のもとに集まっている人たちのすごさを、いっておきたいと思います。月一回の勉強会のために、遠くは木曾郡南木曾町なごそまち、上高井郡小布施町おがせまち、北佐久郡軽井沢町かるいざわまちなどから、場合によると休みを取って、松本の私の研究室へ集まります。勉強するためにとはいっても、来るのには時間もお金もかかりますよね。それでも彼らは勉強すれば、地域に恩返しができるからと、自分のお金を出して集まっています。いい展示をするのだしたら、そのための努力をしていこう。こういう心持ちで学芸員をしている人が県内にはいっぱいいるのです。

今日ここにも、実は私は目が悪いものですから、ひよつとすると違うかも知れませんが、軽井沢から毎回の研究会に来ている学芸員さんが会場にいるようです。博物館はこんな思いによつても支えられているのです。

我が松本で博物館はこれからどうしたらよいか。学芸員だけでなく、市民一人一人が考えていかなければなりません。博物館の展示とは、いったい何なのか。私たちにとつて必要な展示がどれだけされているのだろうか。観光客のものでない、私たち市民にとつて役立つ博物館を、しっかりと打ち立てていかなければなりません。市民にとつて必要なものはいったい何なのでしょうか。

どこでも博物館があることを誇りにしますが、あるだけを誇りにしたのではいけません。本来は博物館で何が勉強できるかが重要なはずで、博物館で、我がふるさととはこういうところだと、考えることができるかできないかが問題なのです。

松本市立博物館は有名だ

この松本市立博物館は、日本でも有数の博物館です。歴史からしても、内容からしても、日本でも知られた博物館なのです。私がいつも持ち歩いているのは、吉川弘文館から出ている『歴史手帳』という手帳ですが、その一番後ろには、博物館の一覧表がついています。ここの博物館はその中にも入っており、どこからみても日本で有数の博物館です。収蔵品にも面白いものがあります。たとえば、



松本民芸館

木像の道祖神なんて興味深いですよ。それから、民具の良いものがいっぱいありますよ。所蔵しているこういうものが、市民にとってはこういう意味があるのか、しっかり知らせて欲しいものです。私は大村に住んでいますが、大村の三九郎さんくろうの際、昔はあの木の道祖神を新婚さんの家を持っていて、酒で御神体を拭いて清めたとか、一緒に寝たというような話がいっぱい残っています。ところが、そういった民俗慣行や道具などが急激に消滅しているのです。ほんの二〇年、三〇年前まで、ごく当たり前に思っていたものが急激に消えていく中で、私たちはどういう行動をしたらいいんだろう、消えていくことは時代の流れです。でも消してはいけないこともあります。こういう民俗を研究されているのが、こちらの博物館に勤務されている窪田雅之さんたちです。

松本市立博物館の学芸員たちも、ものすごく勉強しています。でも、市民の皆さんとの間に、まだちょっと私は距離があるような気がいたします。それは皆さんの方から、学芸員に身近な問いかけをしていないからです。

このほかにも松本には私の大好きな松本民芸館、旧制高等学校記念館、市立考古博物館、司法博物館など、多くの博物館があります。

博物館は教育施設

税金を出している皆さんは、本当に博物館が必要なのか、という質問をどれだけしているのでしょうか。市民のための博物館が、観光客のための博物館であっては困ります。本来、博物館は税金を出してつくり、維持費を捻出している我々市民のための施設なのです。

皆さんの中に小中学校の建物、小中学校の教材にお金をかけるのに反対する人はいますか。いませんよねえ。それは、子どもたちは、私たちの宝だからです。次の時代を担ってくれるのは子どもたちであり、彼らの知識が増えることは、より良い未来を築く財産になるであろうからということ、教育費は惜しみなく出してやろうと思うのです。私も、子どもが今年、受験生ですけれども、「おまえ、金がかかるから大学へ行くな。親父の給料ではとても大学に行かすことはできない」とはいいません。みんな、無理をしてでも子どもの教育のために頑張ろうと考えます。教育は大事だとみんなが思っているわけです。博物館も本来、教育施設なのです。

教育施設は普通、地域に住む子どもたちのために用意します。小中学校は観光客用に整備しません。教育施設である博物館は本来、住民のためであり、小中学生にとっても学びの場所です。でもこのままでは、松本市立博物館が地元の小中学生にとってどれだけ学びの対象になっているか疑問です。繰り返し申し上げますけれども、博物館は教育施設であり、未来のための投資なのです。ところが市民の多くは、博物館をそのような場所だとは考えず、古いものが並んでいるところだと思っっているようです。

松本のことを知ろうとして博物館へ来ますか。あるいは松本のことを知りたいと思つて来て、それに対応できるだけの施設になつているのでしょうか。もしまだそういう状態になつていないのだつたら、その方向に向けてみんな動きましよう。

松本にはすばらしい人がいる

松本を知るために、もつとみんなで周囲を見ませんか。私は、松本で本当に誇るべきは、市民でなければいけないと思つています。私は学生時代に松本で学ばせていただきました。その時代に感謝すべき人が二人おいでです。

一人は、長らくこの博物館で古文書などを整理された小沢寛夫先生です。私が大学二年生の時、当時、松本城管理事務所にいらつしやつた先生から、はじめて松本城の黒門の上で古文書を教えていただきました。それ以来、在学中、一週間に一回ずつ小沢先生に教わりました。小沢先生はその後こちらに移りましたが、ことあるごとにいろいろなことを教えてくださいました。本当はものすごい先生でありながら、そんなことは微塵も見せずに、市民の皆さんに應對しておりました。松本市はこういう人を擁していたのです。

それから、もう一人の方は、私が学生だった時、三年生まであがたの森にいました。あがたの森を駅側に来て少し北に向かったところに、今は古本屋さんになっていきますけれども、凌雲堂りょううんどうという本屋

さんがありました。そこのご主人は永田さんといいました。私はあまりお金がないものですから、漫画本を立ち読みに行っていました。本を買わずに漫画本を読みに行っているうちに、だんだん顔を覚えられました。金にならない学生ですから、普通だったら追い出されますよねえ。「漫画本を読むな」といわれるだろうと思つたら、「外じゃ寒いだろうから、中へ来て読むように」といわれまして、そのうち、場合によつては、お茶が出るようになりました。

卒業する時に、菓子折りを持つて、どうもお世話になりましたつて挨拶に行つたのですが、ご主人はレジからお金を出しまして、「おお、おめでとう。お祝いだ」といつてくれました。「ところでおまえ、なんとという名前だ」つて聞かれたんですよ。「もう親しくなつたから、名前を聞くのは失礼だと思つたから聞かなかつた」といういい方をしてくれました。

松本のすばらしいのは、そういう気持ちの温かい人がいっぱいいることです。私が恩恵を受けたよくな、心の温かい人をもつと育てていかなければいけないと思います。今まわりを見てみると、人間関係がぎすぎすしています。その中で松本が本当に誇れるのは、魅力的な人がいっぱいいることだ、と思つています。でも、そういう人として惹かれるような人たち、光り輝く人をつくつていくためには、教育が必要なのです。皆さんはそういう視点で松本を見つめ、人づくりに尽力していますか。

今のところは、行政は博物館にいかによく多くの人が来て、入場料が落ちていくかといったことしか考えていないようです。教育は未来への投資で、博物館はその一翼を担っているのだという感覚がほと

んどありません。だから、私は松本の皆さんに、改めて博物館は教育の場で、未来への投資であり、私たちが自分たちを取り戻す場所だということをお願いしたいのです。

ふるさとを学ぼう

そのためには、もつとふるさとを学べるような状況をつくっていかなければいけません。松本でも、ボランティアでいろんなガイドなどをしてくれる人がおりますが、市民の皆さんがもつと松本に誇りを持たなければいけません。

そういう活動の参考に、一つご紹介します。これは、私の友人が中心になって作った『ボランティアガイドがすすめる 松代見て歩き』（二〇〇二年刊）というガイドブックです。松代を見るのに、こんなところが良いですよ、と松代のボランティアの皆さんが作った本です。普通、本を作るには、初校、二校、三校と繰り返しますけれども、四校までやっても、ガイドさんたちが多くの箇所を直されて、どんどん時間と経費がかかって、大変だったと聞きました。

私はこれを、すごいなって思うのです。この本を全部市民が作ったんですよ。この博物館でも、松本で行くべきところ、観光するところ、良いところを紹介する本を出しています。本当に良い本を作っています。でもこの本は市民の手になるのです。皆さんは松本の良いところ、自分の良いと思うところをみんなで持ち寄って、これだけの本が作れますか。これは、やっぱり見習うべきだと思います。

す。この背後で、すべてに目を配っていたのは「真田宝物館」の学芸員の原田和彦さんでした。

学芸員は人を育てる

ちなみに、こういうことをやるっていうことで一番きついのは、人を組織している人です。みんなが集まっても、それだけでは何の役にも立ちません。いかにして仲間をつくり、それを組織化し、どういうふうにしてエネルギーを保っていくかが問題です。

これからの学芸員の大きな役割の一つは、ここにあるように思います。学芸員は、知識の切り売りではなくて、どういうふうにも人を育てていくかに能力を発揮することが求められています。全体として地域の文化を、どこに焦点を当ててリードするかを考えなければいけません。いうならば、社会のコーディネーターこそが、学芸員だという時代になりました。

これは、松本市の博物館の学芸員だけの問題ではありません。皆さんが、「市民学芸員」とか、「まると博物館構想」というのであれば、松本市内のどこが優れていて、どこが劣っているかを市民の皆さんが知った上で、市民がまるごと学芸員の能力を持たねばならないでしょう。とすると、自分のふるさとはこんな良いところがあるよ、僕の思うところはこんなところだよ、と伝えられるだけの知識を持って、なおかつ横につながっていかなければどうにもなりません。今は本物の学芸員が、市民を学芸員に育てるべき時ですが、現状ではどうもそこまでいっておりません。

松本が良いと思うんだったら、どこが良いのか、もつともつと学ばねばなりません。これをするためは、我々みんなが、松本の未来を考えていくべきです。先ほどいいましたように、博物館などで私たちが勉強するということは、「私」を知り、「私」を豊かにするためです。それはそのまま未来を創ることであり、みんなが自分を学べば他人を尊重でき、最終的にはすばらしいふるさとをつくることにつながります。換言すると、私たちの目的の一つは地域づくりです。地域をつくるということは、みんなが自分の住んでいるところが、良いところだなあと思えるところから出発します。

地域づくりとばか者・若者・よそ者

聞いたところによると、地域づくりで必要なのは、「ばか者」「若者」「よそ者」なんだそうです。この説明に私は「なるほどなあ」と、共感しています。

「ばか者」という言葉が、まずいいと思うのです。この場合の「ばか者」というのは自分の利益を考えずに、他人のために尽くせる人だと私は理解しています。ここでいうならば、松本を良くするため、自分が持っているものは全部投げ出してもいい、という志やエネルギーを持っている人じゃないかと思えます。松本にはそういう人がいるんですよ。この市には間違いなく「ばか者」がいます。でも数は少ない。みんなでもう少し「ばか者」になって、松本まると博物館の学芸員になっていきましよう。ともかく、まずは「ばか者」になりませんか。

次に「若者」ですが、これも大事です。今日ここにおいでの方々は、そういつては失礼ですけれども、若者が少ない。こちらから見ますと、私のゼミの学生が一人紛れてはいますが、平均年齢はほとんど私と同じくらい、あるいは私より年上になってしまいかも知れません。これで地域を良くするための活動ができるでしょうか。地域を良くするために活動してくれる人たちには学んでもらう必要がありますので、博物館で学ぶべきは若い人です。若い人をつくるのは私も失敗しています。うちの子どもも「お父さんと旅行に行く」と博物館ばかりで面白くない」といいます。どうも私の場合は子どもに博物館を押し付けたみたいで逆効果だったので、本当は子どもが博物館に行ったら、「楽しいところだった」といつてくれるような博物館にしたいですよ。町づくりをやってももらうためには、エネルギーが必要です。いくら「ばか者」がいても、手足になって動いてくれるのは若い人がいないとどうしようもありません。若い人たちのエネルギーを吸収し、きちんと組織していかないとまちづくりはできません。松本では地域づくりのために、若い人たちをどのくらい用意できるのでしようか。私たちはもう一回、人づくりから出発しなければなりません。未来への投資は、博物館だけでなく図書館もそうですけれども、施設をつくるだけでは駄目です。みんなで若者がどうやったら動きやすいのかも考えていかねばなりません。

松本というか、長野県へ来てつくづく思うのは、年配の方で「俺が、俺が」と、前に出たがる人が非常に多いことです。逆に自分は裏方になって、どうしたら若い人を前面に出せるか、ということをし

考える人が少ないようです。

私が最初に県の文化財保護審議委員になった時、山梨県の教育委員会の人から、「知ってますか、先生は長野県に年齢を間違えられたみたいですよ」「何かさあ、長野県教委は先生がもつと歳がいつていると思つて文化財保護審議委員にしたみたいですよ」と聞いたのです。行つてみたらねえ、年配の方からねえ、「おお、笹本、おまえも助教授になつたか。そうはいうけどなあ。俺の孫より若いんだよなあ」という最初の言葉をいただきました。年齢主義をずっと繰り返していたら、若い人たちが思うように活動できません。私たちの世代、およびそれより年配の方がここまで社会を悪くしたのですから、私たちは裏方になつて、若い人たちがどうやったら動きやすくできるか考えるべきでしょう。ぜひ、地域を良くしてくれるような「若者」をつくりませんか。我々が「ばか者」になつて、「若者」をつくつていかなければ、世の中は良くなりません。

そして、「よそ者」が必要です。私は先ほど述べました飯山で、「よそ者」に徹しようと思つています。よその人は他のところと比較しながら、地域を評価し、ものをいつてくれます。よそから来た人たちは、すでに違う場所であることを見えていますから、しつかり地域を比較観察することができるところです。松本しか住んだことのない人にとつては、松本が当たり前だと理解していますから、博物館がこれだけあるのも当然だと思つています。講演会は市などが主催するのが普通だと考えてしまいます。「よそ者」ならば、これが当然でないことを指摘できるのです。松本市では、松本を好きな「よ

そ者」をどのくらい用意できるのでしょうか。

松本は緑が多いか

だんだん極端なことばかりいって申し訳ないのですが、二〇〇一年五月一二日に「環境・観光」シンポジウム（甲州街道二〇〇一諏訪サミット）が諏訪市でありました。その時に、参加者の一人が「皆さん、諏訪はいいですね、緑が豊かで」という言い方をしたので、私はムツとして「松本も諏訪もそうだけど、本当に緑が豊かだと思ってるのですか。私が住んでいる松本はあまり木を大事にしている。まわりの山はきれいだけれど、市内の中央部で大きな木がどれだけあるか、緑滴る木



広沢寺参道

がどれだけあるか。観光客はまわりの山を見、アルプスをいいというけれども、アルプスだって近くへ行くと荒れていたり、ゴミが落ちていたりで、遠くから見ているというだけです。諏訪の中にどれだけ木があるんですか」といつてしまいました。

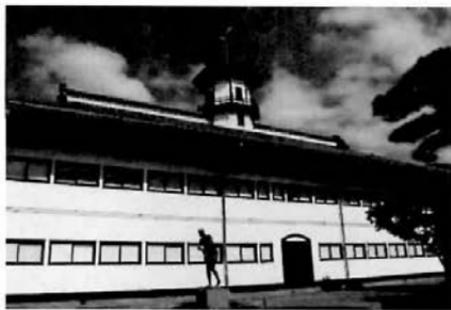
その時に、ちよつと口を滑らし、「今日お集まりの皆さんの中に、諏訪は本当にいいと思って、何度でも来ようと思ってる人はどのくらいいますか」ともいいました。

後のレセプションで、何人かの人から「私もそう思います。あんまり縁が多くないですよね」と県外の人声がかけてくれました。松本はどうですかね。本当に良いと思えるようなことを、どれだけ用意しているのでしょうか。私たちが未来に対してどれだけのことをやっているのでしょうか。よそ者はいろんなことをいってくれますから、松本のファンの「よそ者」をたくさんつくっていきませんか。

過日、飯田で「城跡を活かしたまちづくり——飯田城と城下町——」の題で講演した時、まちづくりの講演会に若い人が来ないような状態がいいのかと述べました。ところが聴衆の中に若い女性が二人いましたので、「この二人は、実にいいじゃないですか」っていったら、そのうちの一人が手をあげ、「実は昨日、引越してきたばかりなのですが、こういう講演会があると聞いてやって来ました」といいました。もう一人の若い女性は、「引越しの手伝いに来て、彼女に誘われたので来ちゃったんです」とのことでした。それで私は彼女たちを持ち上げまして、「でもいいでしょう、こういう話が聞け、町を良くしようという人がこれだけいるんだから」と述べたところ、「どうしたら市民の中に入れますか」と聞かれました。「皆さん、この人はもう仲間ですよ。こういう人を大事にして、こういう人が動きやすいようにしてください」と続けたところ、「そうだ、そうだ」と賛同してくれました。松本でもよそ者が簡単に市民の中にとけ込め、その力を発揮できるような環境を整えねばなりません。

教育には金がかかる

私たちは、教育はコストがかかるものだということを忘れがちで、教育費用を惜しむようになりました。でも、かつての松本は違いました。開智学校は、コストがかかっても、無理してあれだけのものを用意しました。明治に大きなお金をかけてつくった学校が、今は松本の誇りになっています。私をもっとすばらしいと思っっているのは、山辺学校なんです。開智のギヤマン学校に対して、山辺は障子学校ができているので、障子学校と呼ばれます。これはすばらしいことだと思いませんか。山辺



山辺学校

学校は地域として精一杯つくった立派な学校です。大事なものであったからこそ、それが残ってるんですよ。ああいう建物や、そこで学ぶ子どもたちを育ててきた松本市が、今や教育にどのくらいの情熱を傾けているのか、少し疑問が湧きます。

私が学んだ信州大学の前身である松本高等学校は、松本市と長野市が自分たちの方へと綱引きをし、松本に熱意があって、お金や土地などを出したからあそこに建てられたのでしょうか。その結果、松本が文化都市になったことは否めません。こういう過去の事実と比較した時、私たちは将来に向けてどれだけ教育の場を用意できるのか、どれだけ投資を繰り返しているのか、もっと考えていかなければなりません。



あがたの森

そうなってくると、松本がよその人にどう思われているかよりも、松本市民にとってどうであるかが大事です。もっと未来を考えながら、行動していかねばなりません。

木を植える

たとえば、松本市は一〇〇年先、二〇〇年先に向けて木を植えているのでしょうか。

ちよつと皆さんに聞いてみたいのですが、松本に緑がいっぱいあると思っている人はどのくらいいますか、いたら手をあげてください。ほとんどいませんね。私と同じように、もっと緑があった方がいいだろうと思っている人はどのくらいいますか。こちらは多くの方が手をあげてくれますね。そうでしょうか、もっと緑が欲しいでしょう。だったら今すぐに全部植えなくたって、一年に一本ずつ植えたって、五〇〇年経ったら、松本のメインストリートは日本で一番大きな木が育っている、これが夢じゃないですか。今私たちはそのくらいの夢を語れるようにしていかなければならないのです。

松本城の見どころ

今日、当初の予定ではしゃべろうと思っていた松本城のことですが、あの城の見どころの一つは石垣だつて知っていますか。あの石垣はものすごくいい石垣なんです。松本城の前身を武田信玄が築いていますよね。武田信玄には石垣の技術がないので、掘を掘ったり、土を盛り上げて土塁をつくったりする程度でした。松本城の石垣は、武田氏が滅亡してから、その当時、最先端の技術といえる穴太積みあなうという積み方によつて築かれた、すばらしいものなのです。その上に建物が残っているんですよ。

ところが、松本城で石垣を見ている人はほとんどおりません。いい石垣だよなあって頼ずりでもしていたら、ちよつとこれは危ないかも知れませんが、せめて石垣に興味を抱いて欲しいですね。どうしてこういうふうになつているんだ、松本城の見どころはどこにあるのか、こうしたことを市民にきちんと説明して欲しいものです。

松本城では建物の説明が中心になりますが、あの石垣ができた時には松本の住民はびっくりしたはずです。つまり、高い石積みいしづみを築くなんていう発想がなかった時に、最新の技法で高い基礎ができて、その上に天守閣が建てられたのです。松本の住民は仰ぎ見て、すごいなつて思ったことでしょう。

もう一つあります。松本城から金箔瓦きんぱくが発掘されていることを知っていますか。金箔瓦というのは、豊臣政権が「俺たちはお金があるだろう、力があるだろう」と誇示するために、瓦に金箔を貼つて見

える場所にすえたものなのです。豊臣政権の勢力が広がってくるにしたがって、どんどん、どんどん関東の方に、金箔瓦を置いた城が進んでいきました。だとしたら、松本城の見学は、いったいどういふふうに理解しながら、どこを見ればいいのかということだって、学ばなきゃいけないですよ。今のように、松本城より高いところから松本城を見たのでは当時の人の気持ちはわかりません。今後とも松本城を観光の中心にすえようとするならば、見上げる松本城のイメージが大事ではないでしょうか。私たちの観念では天守閣の高さも低いかも知れないけれど、四五〇年前には、ものすごく高いとみんなが思っていたはずなのです。わかりやすくいうならば、東京都庁の建物が松本城なのです。あのような建物が、松本にできたらギョツとしますよね。そういう感性に訴えるっていうようなことを、きちんとやっていかなきゃいけないと思います。

松本の未来に向けて私たちはいったい何ができるのか、もうそろそろ考えなくてはいいけません。

松本の歴史を見よう

そのためには、松本の良いところ、悪いところ、その双方をしっかりと見ないと駄目です。地域の歴史をしっかりと見ていきましょう。

私は大村にいます。大村は大村で、様々な歴史がありました。たとえば、私が住んでいるすぐ近くに大村公民館がありますけれども、その脇には、井戸杵が残されています。江戸時代に、大村は、洪



大村の井戸



女鳥羽川

水にみまわれて集落が移ったのだそうですね。実は井戸枠だけを残しましたので、今、井戸枠のある位置を残してくれている。つまり、石で残した井戸枠一つから大村の歴史が見えるわけです。そういうことを学ぼうとしたら、過去の文化遺産、文化財が残っていることがすごく重要です。

今、松本市民のほとんどが松本で一番怖い災害は、牛伏寺断層ごふくじが原因になって起こる地震だと思っています。それはそれで間違いありません。しかし、日常的に注意したいのは火事です。松本は火事が多い町でした。松本で私の好きな景観をなしている土蔵造りのほとんどは、明治につくられたものです。土蔵造りには、火災の歴史、松本の歴史が詰まっています。

また松本は水害の多い町でした。特に、女鳥羽川めとほがわを見ていただければわかりますように、あれは自然の川じゃありませんから、何度も何度も氾濫はんらんしました。だとしたら、私たちの未来の町はいいと



伊和神社のケヤキ

うあるべきか。それもまた、私たちがきちんと考えていかなければいけません。ふるさとの川の流れがいったいどういふふうに変わってきたのか。ふるさとの昆虫はいったいどうなってきたのか。もつともつと考えて欲しいと思います。

本来ならば誇るべきは、食文化だと思うのですが、松本でしか食べることができないものはどれだけあるのでしょうか。松本でなければ、見ることでできないものはどれだけあるのでしょうか。足りなかつたらつくっていけばいいのです。松本の食文化は豊かなのでしょうか。私たちは日本に向けて、松本はこんなものがうまいよと、本当にいつているんでしょうか。

市の景観をつくろう

もう、東京・ニューヨークなどといったよその都市はどうでもよくて、市民にとって松本市が一番良くなくてはなりません。松本で一番どういふところがいい、どこが誇りだということを、一人一人の市民が認識し、未来に向けて動いていく、これが大事です。そのために、松本を学ばずにどうするのですか。松本がどのくらい素敵なところか、認識せずに、「まるごと博物館」なんていえるのでしょうか。



高橋家住宅

私のいいたい「まるごと博物館」は、松本市全域が全部学ぶところだということです。ですから点のように、この建物がいいですよ、あの建物がいいですよ、ということは、個人的には好きではありません。点を残すより、面としての雰囲気を残しませんか。

松本は城下町だというのですが、江戸時代の武家屋敷が何棟残っているかわかりますか。市の文化財に指定されている高橋家住宅と、県宝に指定されている橋倉家住宅しか残っていないのです。この建物が離れたところに点として残っているだけで、城下町松本といえるのでしょうか。よその都市ではわざわざ城下町づくりをしているんですよ。一昨年行った、大分県の杵築市の場合というと、町づくりのために市役所までも瓦屋根にして町並みの中にとけ込ませています。どこでもふるさとに合った景観を一生懸命つくってるんですよ。私が学生たちに、「飛騨の高山と松本とどっちの方がいいですかねえ」と聞いてみると、「飛騨の高山の方がいい感じだ」というんですよ。金沢でも高山でも景観をつくっています。松本市の場合には、松本らしい景観づくりを努力してこなかったような気がいたします。

松本城を中心とする城下町の景観が必要ならば、今建物は残っていなくても、家の周囲の塀や垣根

だけでも、雰囲気をつくるために昔風のものに揃えるとか、お互いのためだから個人としてもこま
で我慢しようとかいうことを、みんなで少しずつ考えていかなければなりません。

市民みんなが学芸員

そのためにも、皆さんが市民として自分たちのふるさとを知っている人になって欲しいものです。
一人一人がきちんと松本市の知識を持った学芸員になっていただきたいのです。今のまま何でも欲
しい、何でも展示しようというのではなく、松本市には何が足りないんだろう、どこがいいんだろう、
私たちはどんなことができるんだろう、自分が他人のために何を差し出すことができるのか、こう
いったことを考えていただきたいものです。

このために、一つは、松本市の学芸員の皆さんに頑張ってもらいましょう。なぜなら、松本市の学
芸員の皆さんは、我々の船頭さんだからです。船の責任者である船長さんは市長のはずですよ。市
の未来に向けて舵をとってもらうためには、四〇〇年先まで私たちに夢を語って欲しいものです。市
民が共有できるような夢を抱きながら、舵を取って欲しいと思います。

私たちはこれまで間違えたことをいっばいしてきました。先ほど皆さんの多くは、お金がなくても
幸せにはなれるといっているながら、お金だけを求めてきたような気がいたします。私もそうです。で
も、もうここで、ふるさとのために尽くせることが、喜びであり、文化だと考えていかなないと、良い

未来はやってきません。皆さんが住んでいるそれぞれの集落には、地名も地形も土も、ありとあらゆるものが文化として凝縮ぎようしゆくされているはずで、知るだけでは意味を持ちません。知った上で我々が次の文化をつくっていくかねばなりません。松本はこんなところがいいんですよと、自覚しながら、次の文化を創造していきませんか。

もう今までのように、知ればいいんだ、暗記していれば偉いんだ、知識量があれば松本を知っているんだ、というような評価はやめましょう。私たちが勉強するのは無知から脱却するためであり、私たちが知るのには私たちが心豊かになるためであり、私たちの心の豊かさがそのまま未来を豊かにするのだ、学びは地域づくりに直結するというぐらいの気持ちになって、動いていきませんか。

本日はもう少し具体的な話をするつもりだったのですが、途中からどんどんレジユメの内容からはずれてしまいました。ただ、皆様の真剣な聞くエネルギーによって、おかげさまで私の主張したいことは述べる事ができたようです。講演で一番重要なのは、私が主張したいことを皆様にお届けすることだと思っていますので、一応、これで終わらせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。